

「機密戦争日誌」

原 剛

防衛研究所が所蔵している「機密戦争日誌」が、昨年一二月から、全面公開された。久しく全面公開の要望があったが、漸く関係者の了解が得られ全面公開されることになった。これを機会に、「機密戦争日誌」の史料の価値と来歴について以下簡単に説明する。

一、「機密戦争日誌」の史料の価値

「機密戦争日誌」は、旧大本営陸軍部の第二〇班（戦争指導班）の参謀が、毎日の業務を交代で記述し、庶務将校が清書した、第二〇班としての業務日誌である。現在防衛研究所図書館に所蔵されているのは、昭和一五年六月一日から二〇年八月一日までのものである。執筆を担当したのは、期間の長短はあるが、種村佐孝・原四郎・野尻徳雄・田中敬二・甲谷悦雄・橋本正勝の六名である。

第二〇班は、昭和一一年六月に新設された戦争指導課が、昭和一二年一〇月作戦課の戦争指導班に改編縮小され、さらに昭和一五年一〇月に作戦課から独立して参謀次長直属の第二〇班として新設された。その後、昭和一七年二月第一五課に改編され、昭和一八年一〇月再び次長直轄の

第二〇班になった。昭和二〇年四月、陸軍省と参謀本部の二位一体制採用にともない、第二〇班は陸軍省軍務課と合併し終戦に至った。

第二〇班の業務は、戦争指導に関する事務と大本営政府連絡会議に関する事務であった。従って、この「機密戦争日誌」には、当時の政府と陸軍さらには海軍が、戦争指導についていかに考え、いかに実行しようとしたかが記録されている。これに類する記録は、政府側にも海軍側にも残されていない。この意味においてこの「機密戦争日誌」は、当時の政府と陸軍ならびに海軍の戦争指導について知り得る第一級の史料であるといえる。

しかし第二〇班は、昭和一一年創設以来、小世帯の数名の班員でしかも頻繁に組織が改編されるという状況にあって、数倍の陣容と伝統を誇る作戦課とか陸軍省軍務課などに比べ、陸軍部内における力関係・影響力は遥かに弱いものであった。

それだけに、執筆を担当した夫々の参謀が、組織としての力の限界に焦燥し切歯扼腕しながら記録し、時には個人的感情をも交えながら記録

している部分があるのもやむを得ない面がある。このような一面があることを差し引いても、なおこの「機密戦争日誌」は、第一級の史料としての価値を失うものではない。

この「機密戦争日誌」は、戦史叢書一〇二巻の編纂にあたり、その中核的史料として頻繁に引用され、史料価値の高いことが証明されたことは周知のことである。

二、本史料をめぐる経緯等

昭和二〇年八月一四日、日本政府は閣議でポツダム宣言受諾を決定するとともに、重要機密文書の焼却を決定した。これに基づき陸軍大臣は夫々の部隊・官衙・学校などに対し機密文書の焼却を指令した。軍務課に併合された第二〇班の機密文書も、この指令により焼却されることであつたが、庶務将校中根吾一少尉は、高級課員山田成利大佐の許可を得て、重要書類である「機密戦争日誌」・「大本営政府連絡会議審議録」・「重要国策決定綴」・「御前会議議事録」などを、青梅線沿線の自宅に搬出し、ドラム缶に詰めて地下に隠匿した。

同年末、当時第一復員省史実調査部に所属していた元第二〇班の原四郎中佐が、GHQの追求を逃れるため、これらの史料の隠匿保管を継承した。

昭和二十二年一二月、服部卓四郎元大佐が史実調査部長になると、占領時代の終わりを目途に戦史編纂を計画し、戦争指導関係の編纂を元第二〇班の堀場一雄元大佐・原四郎元中佐・橋本正勝元中佐に担当させる予定で、「機密戦争日誌」などを彼等に分割保管させた。

講和条約発効後の昭和二八年四月、服部元大佐が主宰する「史実研究所」が創設されると、同研究所がこれらの史料を一括して保管し、その後、服部著の「大東亜戦争全史」(鱒書房、昭和二八年刊)の編纂に利用された。昭和三五年四月、服部元大佐の急逝により、同年六月、これらの史料は防衛研究所戦史室に移管され、現在は防衛研究所図書館が所蔵管理している。

なお、これらの史料のうち、「機密戦争日誌」を除いた史料のほとんどは、昭和四二年に「杉山メモ」(上・下)および「敗戦の記録」と題して、原書房から出版され、多くの研究者に活用されている。

「機密戦争日誌」は、長く第二〇班にいた種村佐孝元大佐が、シベリア抑留から帰国し、昭和二七年に、その主要部分を平易な文に修文するとともに表現が適切でないと思われるところを削除し、さらに自分の記憶に基づく所見を書き加えて、「大本営機密日誌」(ダイヤモンド社)と題して出版した(本書は絶版になったが、芙蓉書房が昭和五四年に復刻、さらに平成三年、新版として再版した)。この「大本営機密日誌」は、第二〇班の「機密戦争日誌」そのものではなく、あくまで種村氏個人の日記としての出版物である。

また、雑誌「歴史と人物」の創刊号(第三号)昭和四六年九月(一)月、中央公論社刊)に、作家児島襄氏の解説付で「大本営機密戦争日誌」として、その重要箇所がほぼ原文どおり掲載されている。ただし掲載量は原文の約六分の一程度である。「機密戦争日誌」が、より多くの研究者に利用されることを期待したい。